

全国大学書道学会 会報

35

令和8年(2026)
2月1日発行
全国大学書道学会

学会の一年を振り返つて

会長 横田恭三

新年を迎え、一言ごあいさつ申し上げます。

二十一世紀も瞬く間に四半世紀を過ぎようとしている今日、目まぐるしく変化する社会に戸惑う日々が続いています。

さて、本学会においては、この一年に特記すべき行事がいくつもありました。昨年三月下旬に台湾藝術大学において開催された「第一回国際学術交流（台湾）」では、永由理事長をはじめとする十七名の訪台団を組織して参加しました。本学会初の海外での学術交流であり、内容は学術シンポジウムのほか、合同書作展も併催され、台湾藝術大学・中華民国篆刻学会・中華民国書法教育学会の方々と交流を持つことができました。詳しくは『大学書道研究』（第十八号）をご覧いただければと思います。

九月十二日、十四日、長野市善光寺にほど近い信州大学教育学部で開催された三学会信州大会では、八件の精力的な研究発表、田島公先生による記念講演、そして〈信州手鑑〉と銘打った「みすゞかる」会員書作展など、小林比立する「淺岡先生頌徳碑」（比田井天来書）の拓本展示も大会に花を添えました。小林先生はもとより、関係各位に心より御礼申し上げます。

十一月二十九日・三十日、学会初の試みになる研修旅行「會津八一と良寛

をめぐる研修」を敢行しました。初日は新潟會津八一記念館・北方文化博物館・諸橋轍次記念館をめぐり、翌日は国上寺および五合庵、ついで良寛堂・良寛記念館を訪れました。會津八一記念館では、まず喜嶋学芸員から展示品全体の解説をしていただき、次に同じフロアにある「いがた文化の記憶館」で開催中の「弦巻松陰と師・上田桑鳩」展を鑑賞、伊豆名学芸員から説明を受けました。その後、別館に移動し、本学会の参与かつ当記念館館長でいらっしゃる野中吟雪先生より四十分ほど講話を拝聴し、さらにご自身が所蔵されている鉄斎関係の優品を直に鑑賞させていただきました。お話の中で「臨書は原典主義」「書の型を学ぶのではなく、書の学び方を学ぶのだ」など、長きにわたる学生指導の中で培われたゆるぎない指導法は強く印象に残りました。

北方文化博物館における午餐の後、『大漢和辞典』の編纂で知られる諸橋轍次記念館に向かいましたが、ここは燕三条駅から東南へ車で五十分ほどの山間に位置します。正面入口の左手には、轍次博士の座右の銘である「行不由徑（行くに徑に由らず）」の巨大な文字板が壁面に取り付けられており、訪れる者に大きなインパクトを与えていました。館内の展示も博士の生い立ちから生涯の業績・作品までよくまとめられており、小林学芸員の丁寧な説明によつて見聞を広めることができました。

このように学会初の宿泊研修とはいえ、講話や史跡・博物館参観はもちらんのこと、会員同士の懇親を深めることができ、有意義な旅となりました。企画運営に携わった関係各位に厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、『会報』三十三号「新生・全国大学書道学会」（小川副理事長）で触れてられているように、役員組織を改善し、国際交流や研修旅行など新たな試みを積極的に行うなど、永由理事長のもと、充実した学会運営が着々と進行しています。会員諸氏のよ

り一層のご理解とご協力をお願い申し上げ、新年のごあいさつといたします。



ご自身の所蔵品を解説する野中先生



この度の全国大学書道学会 第六十七回 令和七年度(信州)大会開催に関して、会員の皆様方からお寄せいただきました温かな御厚情に、改めまして御礼申し上げます。誠に有難うございました。また、書写書道担当教員が一人体制の大学において、学会開催の任を務めることができましたのも、ひとえに、横田会長先生、永由理事長先生、杉山事務局長先生はじめ関係の先生方からのご配慮のお蔭です。さらには、当方所属コースの先生方や学生諸君、学部から大変にお支えいただきました。恵まれましたこれら全てに深謝しております。重ねまして御礼申し上げます。

信州大学教育学部において全国大学書道学会を開催すると決定した時点で、私にはいくつかの叶えたい企画がありました。その最たるもののが、学会会員書作展にて「信州手鑑」を展示したいという目的でした。

「会報 第三十四号」での拙稿にも記載しましたように、信州大学教育学部は、信州大学全八学部の中でも最も小さく慎ましやかなキャンパスです。本会員書作展で一般的な開催形式となる、五十点超えの半折作品を一堂に展示するためのスペースを、学会会場と並行して学部構内に設けるのは難しいのが実情です。私の中には、二〇一三(平成二十五)年度の群馬大会にて「手鑑『群僕閣』」を鑑賞した時から、その感動とともに、いつの日か信州大会をお引き受けする際はこの手鑑に倣わせていただこうとの思いがありました。また、「信州手鑑」の表装は、元木春峰堂堂主の元木忍氏にお願いしたいと考えておりました。元木氏は、この道六十年、修行期は棟方志功からご指名を受け研鑽を積まれた方で、私が最も信頼を寄せる表具師さんです。元木氏にその旨お伝えしたところ、体調面のご事情から、本学会会期に間に合わせる

ためには七月上旬までに全作品をお預かりしたいとのお話を賜りました。

そこで、本学会開催の年、二〇二五年の年明けほどなく、永由先生と杉山先生に、先述の件全てを含めたご相談のメールをお届け申し上げました。その後速に、永由先生から心細やかなお返事をいただき、その中に「考えられる懸念」として、①「一箇月前倒しの締切設定」で「七月上旬までに全作品を揃える」のが本当に可能か ②「仮に締切を七月十日前後とした時に五点が集められるか」のご指摘をいただきました。そこから、永由先生、杉山先生と、どれだけのメールを往還し、考え得る策を講じたか、お二人の先生への感謝の気持ちを筆舌に尽くし難いものがあります。結果として、先述の①②ともにその心配は全くの杞憂に終わり、偶然にも「第六十七回大会」と同じ数となる六十七名の会員からの出品作品と、信州大学名誉教授の市澤静山先生にご揮毫いただいた御作の合計六十八点を収めた手鑑が、「乾」「坤」二巻の体裁で、八月下旬、大変に素晴らしい逸品として完成いたしました。

本手鑑の命名につきましては、「群僕閣」の名(妙)称には及ばずとも、何か妙案はないだろうかとかなり思案しました。一方で、当初から「みすゞかる」しか脳裏に浮かばなかつたのも事実です。信濃の国を表す枕詞「みすゞ」、そして、「信濃」にかかる枕詞「水篤刈る」。これに勝る何かがないものか、無い智慧を絞つて候補を列記し永由先生にご相談したところ、「信州の新酒の名付けができるですね」とのお言葉を頂戴いたしました。やはり「みすゞかる」にしようと決断した次第です。

外題は会長の横田先生にご揮毫を、内題は理事長の永由先生にご揮毫を、との点は最初から心に決めており、手鑑の名称を「みすゞかる」に決定したところで、すぐにお願いを申し上げました。お二人の先生ともにご快諾くださいましたこと、大変幸甚に存じます。横田先生からは漢字の組み合わせによるご揮毫、永由先生からは変体仮名によるご揮毫と、外題と内題が対照的で、誠に雅やかな仕上がりとなりました。この場をお借りいたしまして重ねての御礼を申し上げます。

なお、「信州手鑑『みすゞかる』」展示の様子や、横田先生の外題、永由先生の内題、そして、全ての収録作品は、日ごろよりお世話になつてている学部

最寄りの写真館、「たかの写真館」館主の高橋宏彰氏が、書道三学会の前日と初日の二日にわたり、八時間かけてご厚意で撮影してくださいました。当該の写真を本会報に掲載申し上げます。併せて、この度の学会に際しての企画であった、本学部構内に建立の頌徳碑から学生達自らが採拓し仕立てました二本の法帖「淺岡先生頌徳碑」（杉浦重剛撰文 比田井天来揮毫 大正十年建立）及び「正木先生碑銘」（市村瓊次郎撰文 田代秋鶴揮毫 昭和十二年建立）の実物、並びに事業成果ご報告のパネルを学会会場ロビーにて展示いたしました様子も写真にお收めくださいました。深い感謝の意を込めましてご紹介申し上げます。また、末筆ながら、「信州手鑑『みすゞかる』」を広く多くの皆様にご高覧賜りたく、十二月十九日（金）～二十二日（月）に長野市の信濃教育博物館で公開予定であることも申し添えます。

【二〇二五年十二月二十六日（金） 追記】



会場：信州大学教育学部



お手伝いいただいた学生の皆さん（受付担当）

ながら、信濃教育博物館での学会会員書作展を「令和七年度 信州大学教育学部学生書道展」と併催の形にさせていただきました。（当該学生書道展は例年二月開催ですが、本年度は「特別展」として十二月に開催いたしました。）会期中は、長野県教育委員会教育次長先生、信濃教育会会长先生、市澤静山信州大学名誉教授をはじめ、学部関係の皆様、地域の皆様も多くお運びくださいり、盛会のうちに幕を閉じました。誠に有難いことと、大変嬉しく、また幸いに存ります。

令和八年度の書道三学会は、武藏野大学・武藏野キャンパス（東京都西東京市）で開催されることとなりました。会期は、九月の第二週を予定しています。多くの方々の御参加をお待ちいたしております。

さて、本学は、大正十三年に「武藏野女子学院」という名称で、東京・築地本願寺境内に、関東大震災被災者救護のために急遽建てられた赤十字病院の建物を譲り受け、これを校舎として開校しました。昭和四年に現在の武藏野の地に移転します。武藏野女子学院は武藏野女子大学となり、男女共学により武藏野大学と改称、お台場に有明キャンパスができ、今や十三学部二十一学科を擁する総合大学となりました。

ところで、学校法人武藏野大学は、令和六年五月、創立一〇〇周年を迎える。本学発祥の地・築地本願寺の境内に、「武藏野女子学院発祥の地・学校法人武藏野大学創立一〇〇周年記念・二〇二四」と表面に刻された記念碑を建立しました。東京銀座に隣接する一等地に建立されたので、とてもうれしく思いました。ここには皇室とゆかりのある「九條武子夫人歌碑」（昭和初期建立）があります。建碑にあたり「この碑よりも小さく」というのが同寺からの指定でした。

大学から私にこの碑形案を作成するようにいわれ、時間があると築地本願寺に通い、予定地を眺め構想を練りました。風景にマッチしたデザインとしたかったからです。東京湾にも近い場所なので、「いつ起ころかわからぬ大地震にも津波にも負けない、千年先までもこのままの姿を保てる碑」をめざして考えました。最初から石材店に任せのではなく、石やデザインを決めてから、この理想を叶えてくれる最良の石材店を選ぶという手順にしました。千年先まで文字だけでなく石全体の形が風化・磨滅しにくいようにすることを大前提に、先人の制作した様々な記念碑などを見て歩き、長所と短所

武藏野大学創立一〇〇周年記念碑の建立

武藏野大学 廣瀬裕之

を探りつつ碑石の経年劣化の具合を探りました。

まず、最近流行しているデザイナー作成のモニュメント型式のものは除外しました。これはおしゃれに加工された部分が壊れやすいからです。千年持たせるためには碑形の凹凸がなるべく少ない方が得策と思ったからです。

次に、大きな石に別石を嵌め込んだものは年月を経るうちにその隙間に水や汚れが溜まり、きたないシミが垂れて碑面を汚す可能性が高いことも判りました。私が調査した限りでは、露天のままの建造の場合、拝見した多くの碑石が長くて百年から百五十年ほどで、風化による損傷があることが判つたからです。また、文字刻の部分にペンキなどの色を入れたものは、三十年ほどで剥がれ、無残なまま放置されている碑を多数拝見。後々のメンテナンスの必要性の件が気になりました。よつて以上の予想される問題点をなるべく払拭した碑形をデザインし製作するのが理想であり最良と考へた次第です。

一番大切なのは石の選定です。これはと思ういくつかの主な石の石切り場やその建造物の視察も行いました。最終的に日本一硬く摩滅しにくい香川県高松市から産出する「庵治石」とし、千年持つ可能性のある石というのはこれしかないという結論に至りました。石とデザインが決まると石材店の選定です。庵治石は、なかなか大きな石が取れないのです。それゆえ高価なのでですが、お願いした石屋さんは、最高級の細目こまめの石が採れる大丁場を掘削し、図面通りの大きな良石をぎりぎりまで探して下さいました。

その間に刻すための文字原稿の書の揮毫をしました。考へながら実行せねばならぬことが多く大変でした。石碑の文字揮毫の方法は恩師小木太法先生より、かつて教わった秘伝で実践。碑陰のこれまでの歴史を記した多字数の細字揮毫に苦労しましたが、厚労省から卓越した技を持つ石工として表彰された今回制作をお願いした石材店会長に原稿をお渡しすると「石に刻しやすい書だ」と褒められました。

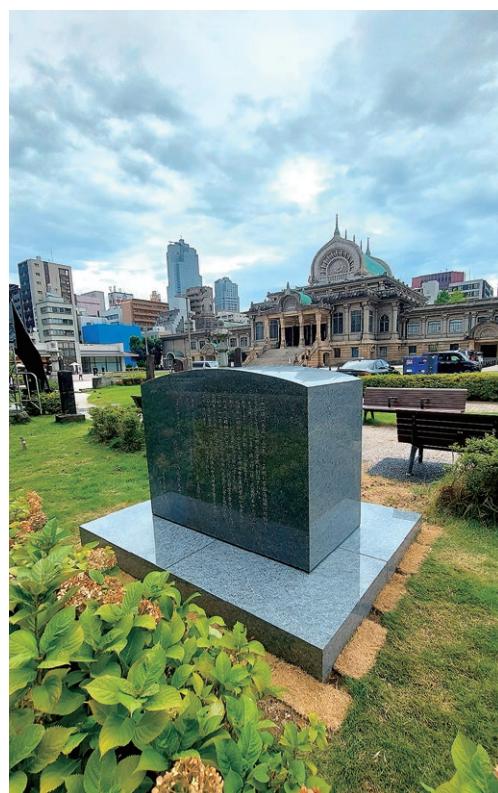
令和六年七月に除幕式を盛大に挙行。この碑石の色は通常淡いグレーなのですが、夏の日光を燐燐と浴びると海の中の様な綺麗なマリンブルーとなり、これには驚きました。『武藏野教育学論集』第十九号（二〇二五年十月）に完成までを詳しく執筆しました。築地本願寺を訪れられた際はぜひご覧い

ただきたく存じます。

本年開催の武藏野大会は武藏野の地で開催いたします。ご協力・ご参加のほどよろしくお願い申し上げます。



100周年碑・碑面 (12月記念法要後撮影)



100周年碑・斜め後ろより眺める

全国大学書道学会 令和7(2025)年度 信州大会 次第

開催日 令和7(2025)年9月14日(日)

開催大学 信州大学

大会会場 信州大学教育学部

《開会式・総会》

●9:00 受付

●9:30～10:20 開会式・総会(会場:N101教室)

【開会式】

1. 開会のことば

信州大学

小林 比出代 先生

2. 開催大学あいさつ

横田 恭三(跡見学園女子大学名誉教授)

3. 会長あいさつ

永由 徳夫(群馬大学)

4. 理事長あいさつ

【総会】

*議長選出

和田 圭壮(福岡教育大学)

5. 議事

(審議事項)

1) 令和6年度事業報告

→ 資料1

杉山 勇人(鎌倉女子大学)

2) 令和6年度決算報告

→ 資料2

尾川 明穂(筑波大学)

3) 令和6年度監査報告

山口 恭子(法政大学)

4) 役員改選について

→ 資料3

永由 徳夫(群馬大学)

5) 令和7年度事業計画

→ 資料4

杉山 勇人(鎌倉女子大学)

6) 令和7年度予算

→ 資料5

尾川 明穂(筑波大学)

(報告事項)

1) [若手会員のための研究発表旅費補助規程] の新設

永由 徳夫(群馬大学)

2) [会員・準会員に関する規程] 改定

→ 資料6

下田 章平(相模女子大学)

[『大学書道研究』投稿規程] 改定

→ 資料7

3) 『大学書道研究』第18号について

草津 祐介(東京学芸大学)

4) 『大学書道研究』のオープンアクセスについて

草津 祐介(東京学芸大学)

5) 国際学術交流専門委員会について

下田 章平(相模女子大学)

6) 新潟研修「會津八一と良寛をめぐる研修」について

角田 勝久(新潟大学)

7) その他

* 議長解任

【贈賞】

6. 令和7年度 全国大学書道学会 学会賞

1) 令和7年度 選考結果について

永由 徳夫(群馬大学)

2) 贈賞

【その他】

7. その他

1) 新入会員紹介

事務局

2) 次年度開催大学あいさつ

武藏野大学

廣瀬 裕之 先生

3) その他

8. 閉会のことば

《研究発表》

- 10:30 ~ 12:10 研究発表／午前の部 第1分科会 (会場: N101教室) 司会: 佐々木 佑記 (五島美術館)
 - 10:30 ~ 11:00 研究発表午前1-①
光明皇后筆「杜家立成雜書要略」にみられる筆線の割れ —有芯筆の構造に着目して—
東京学芸大学教職大学院 小磯 明照
 - 11:05 ~ 11:35 研究発表午前1-②
寺子屋調査から見る手習いにおける書流の実態 —江戸と上野国に着目して—
群馬大学教職大学院 山本 桜子
 - 11:40 ~ 12:10 研究発表午前1-③
貝原益軒の学書法に関する一考察 —『心画軌範』と『和俗童子訓』との比較を中心に
群馬大学教授 永由 徳夫
- 10:30 ~ 12:10 研究発表／午前の部 第2分科会 (会場: N201教室) 司会: 角田 勝久 (新潟大学)
 - 10:30 ~ 11:00 研究発表午前2-①
唐代における刻者の集団に関する一考察 —出身地と活動年代の分布に着目して—
東京学芸大学教職大学院 北嶋 葉菜
 - 11:05 ~ 11:35 研究発表午前2-②
印論における「補刀」概念の研究 —「復刀」との比較を中心にして—
東京学芸大学教職大学院 毛塚 涼斗
 - 11:40 ~ 12:10 研究発表午前2-③
明治期女子教育における「習字」教育とジェンダー化された主体性の形成
川村学園女子大学非常勤講師 河島 由弥
- 13:10 ~ 14:15 研究発表／午後の部 (会場: 図書館2階大講義室) 司会: 下田 章平 (相模女子大学)
 - 13:10 ~ 13:40 研究発表午後1-④
後漢時代中期における楷書系の様相 —長沙五一広場東漢簡牘を中心に—
安田女子大学講師 井田 明宏
 - 13:45 ~ 14:15 研究発表午後1-⑤
木村竹香編『羅漢印譜』の新たな視点による分析
新潟大学教授 岡村 浩

《大会記念講演》

- 14:30 ~ 15:50 大会記念講演 (図書館2階大講義室) 司会: 永由 徳夫 (群馬大学)
 - 演題: 古代における中国書法の将来と古代・中世の書蹟・名筆・扁額の伝来
—禁裏・公家文庫の歴史と収蔵史料画像の公開—
 - 講師: 東京大学名誉教授、公益財団法人陽明文庫理事 田島 公先生

《会員書作展》

- (1) 会期 令和7年9月12日(金) ~ 9月14日(日) 9:00 ~ 16:00
※12月19日(金) ~ 12月22日(月) 信濃教育博物館(長野市)にて一般公開
- (2) 会場 信州大学教育学部図書館2階ギャラリー

《理事会》

- 日時 9月7日(日) 19:00 ~ 20:30 【オンライン開催】

《三学会合同懇親会》

- 日時 9月13日(土) 18:00 ~ 20:30
- 場所 THE SAIHOKUKAN HOTEL(長野ホテル犀北館)

《総会資料》

資料1 令和6(2024)年度事業報告 → 承認

(令和6年)

4月27日 常任理事会、第2回国際学術交流専門委員会
 5月12日 第1回 理事会(オンライン)
 6月1日 会報第32号(福岡大会1次案内)等、発送
 7月13日 常任理事会、三学会合同役員会
 8月24日 大会要項(福岡大会2次案内)等、発送
 9月1日 『大学書道研究』第17号発送
 9月15日 第2回 理事会(オンライン)
 9月20日～22日 書道三学会・福岡大会
 9月21日 全国大学書道学会令和6年度(福岡)大会
 9月20日～22日 会員書作展(福岡教育大学学生会館内大集会室)
 12月7日 常任理事会、学会賞選考委員会、第3回国際学術交流専門委員会

(令和7年)

2月3日 『大学書道研究』投稿論文受付締切日、学会誌投稿論文査読開始
 3月2日 常任理事会、三学会合同役員会(令和7年度大会について)
 3月27日～3月30日 第1回 国際学術交流(台湾)

資料2 令和6(2024)年度会計報告(2024.04.01～2025.03.31) → 承認

A： 収入の部

1 2023年度繰越金	8,333,559円
2 2024年度会費(214口)	1,427,000円
3 『書の古典と理論』印税	318,890円
4 雑収入	
会員書作展協賛費残金	21,000円
大会運営補助費残金	132,102円
寄付	12,000円
預金利子等	4,632円
有高超過	1,840円
合 計	10,251,023円

B： 支出の部

1 大会運営補助費・謝金	170,000円
2 理事会費(会議費・交通費)	340,581円
3 印刷費(学会誌17号353,238円、会報32号64,350円、会報33号266,482円)	684,070円
4 通信費	133,123円
5 事務費(消耗品費、振替口座手数料35,257円等)	106,776円
6 東洋学・アジア研究連絡協議会費	2,000円
7 ホームページ保守・更新費	0円
8 諸行事の開催・準備費等	740,694円
9 雑費	0円
合 計	2,177,244円

● A - B (10,251,023円 - 2,177,244円) = **8,073,779円** (前年度比 - 259,780円)

上記の通り報告いたします。
 以上相違ありません。

令和7年6月16日

令和7年6月16日

会計局

監査

尾川 明穂

中村 史朗

山口 恵子

㊞

㊞

㊞

資料3 令和8(2026)年度～9(2027)年度 役員改選

※別紙参照 書面にて臨時総会を実施

資料4 令和7(2025)年度 事業計画(案) → 承認**(令和7年)**

4月26日 学術賞選考委員会・常任理事会
 5月10日 第1回 理事会(オンライン)
 6月1日 会報第34号(信州大会1次案内)等、発送
 7月20日 常任理事会、三学会合同役員会
 8月5日 『大学書道研究』第18号・信州大会第2次案内、発送
 9月7日 第2回 理事会(オンライン)
 9月12日～14日 書道三学会・信州大会
 9月14日 全国大学書道学会 第67回 令和7年度(信州)大会
 9月12日～14日 会員書作展(信州大学教育学部図書館2階ギャラリー)
 12月19日～12月22日 会員書作展・信濃教育博物館(長野市)にて一般公開(予定)

(令和8年)

2月2日 『大学書道研究』投稿論文受付締切日、学会誌投稿論文査読開始
 3月中旬 常任理事会、三学会合同役員会(令和8年度大会について)

資料5 令和7(2025)年度 予算(案)(2025.04.01～2026.03.31) → 承認**A： 収入の部**

1 2024年度繰越金	8,073,779円
2 2025年度会費(一般210口、学生10口、計220口)	1,310,000円
3 『書の古典と理論』印税	250,000円
4 雑収入(預金利子等)	5円
合 計	9,633,784円

B： 支出の部

1 信州大会運営補助費・謝金	170,000円
2 理事会費(会議費・交通費)	300,000円
3 印刷費(学会誌18号、会報34・35号)	800,000円
4 通信費	100,000円
5 事務費(消耗品費・振替手数料)	150,000円
6 学術振興関連費(外部査読料20,000円、学会賞200,000円、 学会誌電子公開750,000円、旅費補助30,000円)	1,000,000円
7 ホームページ更新費	95,480円
8 諸行事の開催・準備費等(新潟研修)	400,000円
9 東洋学・アジア研究連絡協議会費	2,000円
10 予備費	6,616,304円
合 計	9,633,784円

資料6 〔会員・準会員に関する規程〕改定

〔会員・準会員に関する規程〕 (下線部は変更箇所)

- (1) 会費の未納が、三ヶ年に及ぶときは、会員としての資格を失う。会員資格を喪失した者が、再入会を希望する場合は、滞納年度分の会費を納め、常任理事会の承認を経なければならない。
- (2) 準会員(大学院生)が、大学院生でなくなったときは、準会員としての資格を失う。ただし、届出によって会員として資格を継続することができる。
- (3) 本会の名誉を毀損し、会員として不適当と認められる者、また、研究成果の発表において研究倫理の観点から著しい不正行為があったと認められる者については、理事会の議を経て除名もしくは資格停止等の処分を行ふことができる。

資料7 〔『大学書道研究』投稿規程〕改定

〔『大学書道研究』投稿規程〕に以下の第10項を追加

10. 研究成果発表における留意事項

本学会では、投稿論文(研究ノート、その他の原稿を含む)や発表など(以下「論文等」)に発表された研究成果発表の中に示された、データや調査結果等の捏造、改竄、盗用、論文の二重投稿、不適切なオーサーシップ等を、研究倫理の観点から「不正行為」と認定します。本学会への告発等により不正行為が認識された場合は、理事会の議を経て除名もしくは資格停止等の処分を行いますので、ご留意の上、執筆をお願いします。

会員の異動(新入会員・準会員/退会・退会申出者) ※2024.09~2025.08の会員の異動

《会員》

矢部 紘里	跡見学園中学校高等学校	推薦者: 横田 恭三
伊藤 恵子	跡見学園中学校高等学校	推薦者: 横田 恭三
内田 貴士	愛知県立一宮北高等学校	推薦者: 木村 博昭
近藤 悅子	咲記書の教室	推薦者: 下田 章平
高田咲記子	咲記書の教室	推薦者: 下田 章平
春日 愛美	あづさ書の教室	推薦者: 下田 章平

《準会員》

杜 怡策	東京学芸大学教職大学院	推薦者: 草津 祐介
中村 文香	東京学芸大学教職大学院	推薦者: 加藤 泰弘
北嶋 莉菜	東京学芸大学教職大学院	推薦者: 加藤 泰弘
中山 心路	東京学芸大学教職大学院	推薦者: 城間 圭太
川原 名見	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程	推薦者: 加藤 泰弘
巻山 墨偉	東京学芸大学教職大学院	推薦者: 草津 祐介

《退会・退会申出者》

高嶋 良子 芸術新聞社 浪田 美智枝 備前 徹 蓮見 行廣 岡田 直樹

学会賞の選考結果及び選考理由、学会賞受賞の言葉

島根大学 柳田さやか

本年度より、「学会賞に関する規程」に基づき、「学術賞」「功労賞」の二種類の学会賞が新設されました。

「学術賞」は、「本学会誌を中心いて該分野において継続的な研究実績がある者、または本学会の目的分野において優れた研究成果を挙げ、顕著な功績が認められる者」に対して授与されます。

「功労賞」は、「本学会の発展に顕著な功績のあった者、または本学会関連分野において国内的あるいは国際的に栄誉を受けた者」に授与されます。

本年度は柳田さやか氏（島根大学准教授）に「学術賞」が授与されました。以下に、選考理由及び受賞の言葉を寄稿いただきました。（編集局）

学会賞 選考の経緯ならびに選考理由

全国大学書道学会では、令和七年度より、活躍のあった会員を顕彰すべく、学会賞（「学術賞」「功労賞」）を創設した。学会賞選考委員会は、理事長指名による六名の選考委員によって構成され、慎重審議の結果、栄えある初回の「学術賞」を島根大学准教授・柳田さやか氏に贈ることを内定した。その後、学会賞選考委員会より理事会に発議し、贈賞を正式に決定した。

柳田さやか氏は、広範な視座に立って日本の書の流れを捉え、「日展第五科（書）の誕生とその背景」（『大学書道研究』第十二号）、「三色紙」の呼称と評価の変遷」（同第十五号）といった新規性に富んだ意欲的な論考を学会誌に投稿され、高い評価を得ている。また先年、専著「書」の近代―その在りをめぐる理論と制度』を森話社より上梓され、各誌の「書評」で取り上げられている。着実に研究成果を挙げていることを評価するとともに、今後益々斯界を牽引されることを期待し、「学術賞」を贈呈するものである。

（学会賞選考委員会）



横田会長より賞状等が授与された

受賞のことば

この度は第一回学術賞を頂戴し、大変光栄に存じますと共に、身の引き締まる思いであります。これまでの研究を支えてくださったすべての先生方皆様にここよりお礼申し上げます。

本学会の大会への初めての参加は学部四年次、初めての研究発表は修士課程二年次でした。これまでに計八回の研究発表をおこない、本学会を通して多くのご助言を賜りながら、近代日本書道史の研究を続けてまいりました。今後は書の美や芸術性がどのように捉えられてきたのかという点について、研究を深めたいと考えております。

本学会は一九五九年に設立された歴史ある学会です。設立当初から、書教育の学会と大会を併催しており、書道史と書教育の双方を共に考える学会であり続けている点に大きな特色と強みがあると考えております。今後もその学会に参加しながら、研究を一層深めていきたいと存じます。この度の受賞に改めて深く御礼申し上げます。

柳田さやか氏プロフィール

博士（芸術学）。現在、島根大学学術研究院教育学系准教授。東京藝術大学美術学部芸術学科非常勤講師。全国大学書道学会常任理事。主な著書に『書』の近代―その在りをめぐる理論と制度』（森話社、二〇二三年十月）がある。主な論文には、「昭和初期における上田桑鳩の芸術論の特徴―「主觀」と「筆意」の接続―」（『大学書道研究』十八号）、「三色紙」の呼称と評価の変遷』（『大学書道研究』十五号）、「日展第五科（書）の誕生とその背景」（『大学書道研究』十二号）他がある。

大会記念講演 田島公先生

「古代における中国書法の将来と古代・中世の書蹟・名筆・扁額の伝来—禁裏・公家文庫の歴史と収蔵史料画像の公開—」報告

法政大学 山 口 恭 子

全国大学書道学会 令和七年度 信州大会では、田島公先生による大会記念講演が行われました。田島先生は、宮内庁書寮部、東京大学史料編纂所を経て、現在は東京大学名誉教授、公益財団法人陽明文庫理事、京都府立京美学・歴彩館京都学特任研究員等を務めておられます。ご講演ではこれまでのご研究を踏まえ、「古代における中国書法の将来と古代・中世の書蹟・名筆・扁額の伝来—禁裏・公家文庫の歴史と収蔵史料画像の公開—」と題してお話しいただきました。

ご講演ではまず、「古典籍・古文書の画像の「大公開時代」と大型科学研究費」として、先生が尽力してこられた禁裏・公家文庫関連史料の画像公開への道のりが示されました。それを踏まえ、公開が進む京都御所東山御文庫所蔵禁裏本、および陽明文庫所蔵近衛家伝来本の歴史についてお話がありました。次いで、藤原忠平の日記の抜書『貞信公記抄』の記事が、古代日本において懷素のほか、任幹なる人物の書が将来されていた裏付けとなること、そして、その書法が日本の書に影響を与えていた可能性があることにも言及されました。さらに、東山御文庫本『蓮華王院宝蔵(経巻)目録』と三條西実隆の日記『実隆公記』との照合により、蓮華王院宝蔵収蔵の空海や円珍、藤原行成筆の書蹟が十五世紀末の伏見宮家の蔵書に継承されていたと確認しうることなどについてお話しくださいました。

田島先生のお話は、実に多様なテーマを含むものであります。ご講演の主旨である、禁裏・公家文庫収蔵史料の画像公開、それらをもとに見出される中国書法の将来、古代から中世における書蹟等の伝来についてはもちろん

のこと、近世写本の重要性、目録の学術的意義など、聴講者はそれぞれの問題意識によって多くの示唆を得たものと思います。

筆者にとりましては、禁裏・公家文庫形成の歴史に関するお話をとりわけ心に残りました。中世戦乱による禁裏文庫の被害とその再興、近世における後水尾天皇による書籍蒐集、幾度もの火災、類焼を免れた後西天皇作成の副本の存在意義、また、書籍の一括保存を堅持した近衛家文庫の展開などについてうかがい、度重なる困難を乗り越えて文庫が形作られてきた事実にあらためて驚かされました。守り伝えられた史料そのものの価値を強く認識しましたのはもちろんのこと、文庫の形成や拡充、継承に力を尽くした人々の姿、そして、史料の伝襲にまつわる物語にも思いを馳せました。

ご講演の最後には、公開されている画像を書研究においてもぜひ活用してほしいとのお話もありました。書の伝来や利用についての体系的な研究、天皇家や公家、寺社の蔵書と名筆の伝来・模写との関連、日記類や紙背文書の筆跡についてなど、書領域でのテーマに関する提言はたいへん刺激的であります。書研究がこれまで以上に広がりをもつものになつてゆく可能性を思い描いた次第です。

史料の画像公開の意義は、それらがどのように活用されるかによっても大きく変わると思われます。公開された画像を丁寧に読み解き研究することは、さらなる未来に向けて史料を継承してゆく営みともいえるでしょう。古典籍・古文書画像の活用は、その「大公開時代」に幸いにも立ち会うことができたわれわれの責務でもあるとの思いを新たにしておられます。

最後になりましたが、貴重なお話を賜りました田島公先生に心より感謝申し上げます。



全国大学書道学会の新潟研修 —會津八一と良寛をめぐつて—

新潟大学 角田 勝久

二〇二五年十一月二十九日（土）から三十日（日）の二日間、新潟県内をめぐる研修会が、企画局・小川博章局長のもと開催された。両日ともこの時期としては極めて稀な晴天に恵まれ、越後の銘品と銘酒、そして美食と美観を味わうことができた。以下に本研修の様として、二日間にわたった研修についてレポートしてみたい。

初日は十時十五分に、新潟駅から徒歩十五分の會津八一記念館へ参加者十八名が集合、記念館内で先ず永由徳夫理事長が御挨拶、続いて小川局長から二日間の説明および注意事項などが伝えられたあと、局長お手製の旅の菓が配布され、皆、感動しきり。参観各所の説明文は関先生がまとめられたとの事、有難うございました。

早速展示室を拝観。当日は特別展「會津八一博士が愛した中国美術」が開催中で、早稲田大学會津八一記念館記念博物館所蔵の中国美術品が多数展示されていた。喜嶋学芸員による解説、野中館長による補足説明と続き、四十分ほど展観後、隣接する「にいがた文化の記憶館」に移動し「弦巻松蔭と師・上田桑鳩」展を鑑賞する。本会会員の伊豆名学芸員から作品解説、野中館長から補足説明があり、その後三十分ほど展観後、近隣の小ホールに移動して、野中館長によるミニ講話を拝聴した。

講話の内容は自身と鉄斎の関わりから、書におけるこれまでの学修過程や教育活動の道程、自身が考える書の鑑賞と制作の関連について、さらに会場内には館長が秘蔵する鉄斎作品二十点あまりがずらりと並べられていた。館長自ら解説くださるという思いがけない特別鑑賞が叶い、まさに眼福の至りであったが、時計を見るとすでに十二時半をまわっていた。そもそもお腹が空いていたので次なる目的地、北方文化博物館へバス移動、同博物館の敷地内に建つ味噌蔵で昼食をとった。

北方文化博物館は豪農の館というだけあり、味噌蔵だけでも団体客が数組食事をとる余裕ある広さだから、どれだけ規模の大きな豪農だったのだろうと往時に思いをめぐらす。昼食後、博物館の田中學芸員が特別に準備くださった、同館所蔵の大作『良寛屏風』六曲一双を鑑賞、あまりの圧倒的な大きさに驚かされた。

存在感から一同息をのむ。緊張感もつかの間、博物館内の大きな広間からながめる紅葉で、心が癒された。大広間や庭園の美しさに心を奪われつつ博物館を後にする。

次なる目的地、初日のラストをかざる研修会場は、モノづくりで有名な三条、燕地域にほど近い諸橋轍次記念館である。当初の計画では、出雲崎方面へ向かい良寛記念館を訪れる予定であったが、急遽、諸橋記念館に変更した。諸橋記念館では小林学芸員のお出迎えにはじまり、その流れで館内をくまなく丁寧に解説してくださった。すでに會津記念館での研修スタートから六時間以上経過しているので、東京からの参加者の皆さんには相当お疲れモードの筈が、我々が少なからずお世話になつてゐる諸橋大漢和の生みの親に関する展示だけに、皆さん真剣なまなざしであった。

諸橋記念館を後に、宿泊地である三条アクアホテルへ向かい、十八時から近隣の大人気居酒屋「よね蔵」にて、大懇親会がはじまる。横田会長の乾杯の御発声のもと、和やかに開宴、新潟の料理やお酒が振舞われる中、宴もたけなわ、一人一分の自己紹介スピーチで大いに盛り上がった。ちょうど向かいの席におられた下田先生と早川先生がグイグイ盃をかさねていたのが印象に残る。

翌日も好天。九時にロビーへ集合し、良寛が二十年ほど過ごした五合庵へ向かう。もと五合庵は国上寺の塔頭だったとのこと、五合庵へは国上寺職員の青柳さんが駐車場から国上寺を経由し五合庵へ向かう遊歩道を、じっくり一時間かけて案内くださった。途中に新潟在住の参加者も知らなかつた土蔵があり、その奥に大切に保管されていた良寛作品を見られたことは貴重な体験である。

つづいて五合庵から寺泊へ向かい、魚のアメ横とよばれる市場通りに面した「まるなか水産」で海鮮定食をいただくも、昨日の酒が残つているのか誰もお酒を頼まなかつた。寺泊を後にして、二日間の研修のラストとなる良寛記念館へ。途中、良寛が生まれた橋屋跡地に建つ良寛堂に立ち寄り、ほどなく記念館へ向かう。記念館ではたくさんの良寛作品を味わうも、参加者の龜田先生が館内に展示してあつた龜田鵬齋の扁額『北海雄風』を近親者とでうような眼で鑑賞していいたことが忘れられない。記念館横の坂を上ると小さな丘があり、そこから眺める日本海、佐渡島、越後の空気に一同酔いしれ旅の締めくくりとなつた。二日間にしてはやや盛り込み過ぎの感があつたが、参加者の皆さんと笑顔でお別れできたので若干安堵している。参加者の皆さんと関係の方々、本当に有難うございました。

二〇二五年度 全国大学書道学会会員書作展
信州手鑑「みすゞかる」乾

信州手鑑「みすゞかる」

【外題】横田 閑雲（全国大学書道学会会長）

御
鶯
莉
乾

あまく
鶯の
乾

【内題】永由 徳夫（全国大学書道学会理事長）

敬愛

2 「敬愛」青山 浩之（横浜国立大学）

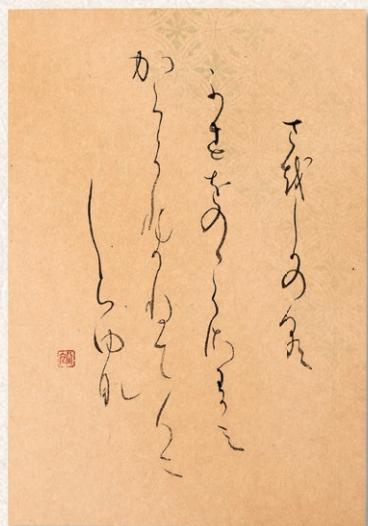
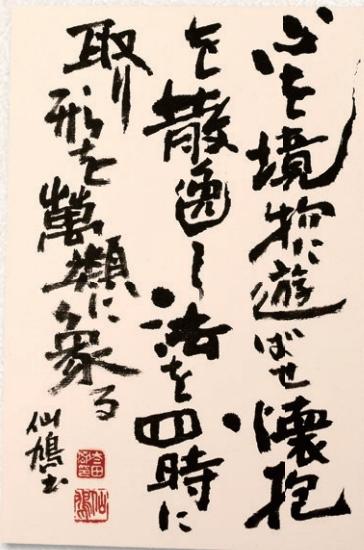
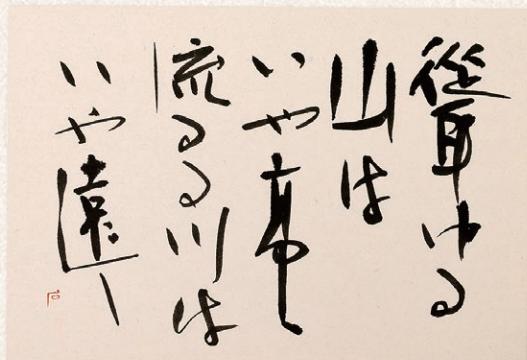
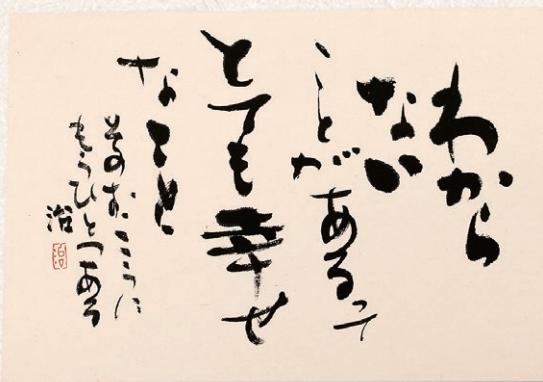
鶯
敬

神山

【贊助】1 「鶯敬」市澤 静山先生（信州大学名誉教授）

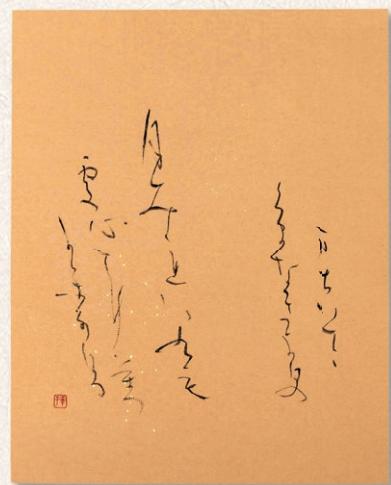
秋風や人わらんと
鳴りし幡の鈴

3 「高野素十句」足立 夏鈴（相模女子大学）

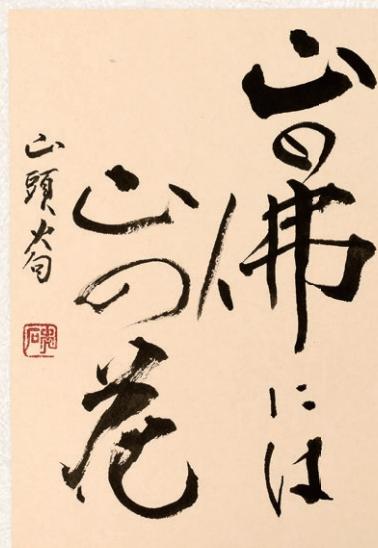




11 「禱」 岡野屋 宏一（東京外国语大学）



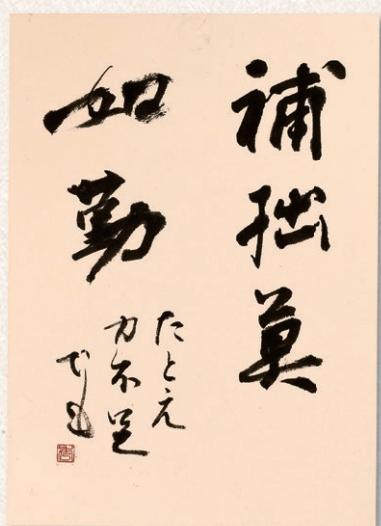
10 「西行の歌」 大野 幸子（桜蔭中学高等学校）



13 「山頭火句」 小野寺 桃石（宮城教育大学）



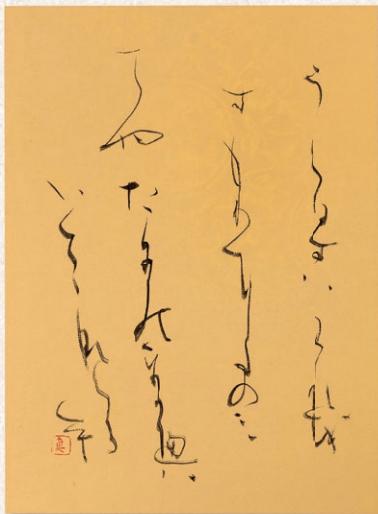
12 「青龍白虎」 岡村 鉄琴（新潟大学）



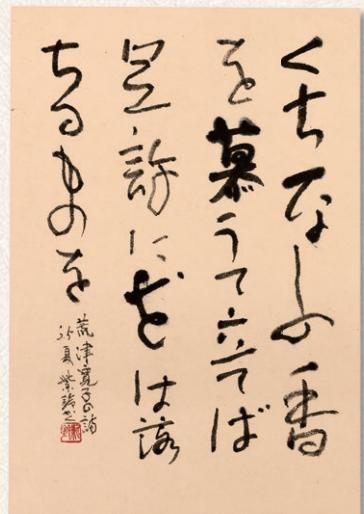
15 「力不足でも、補拙莫如勤」 押木 秀樹（上越教育大学）



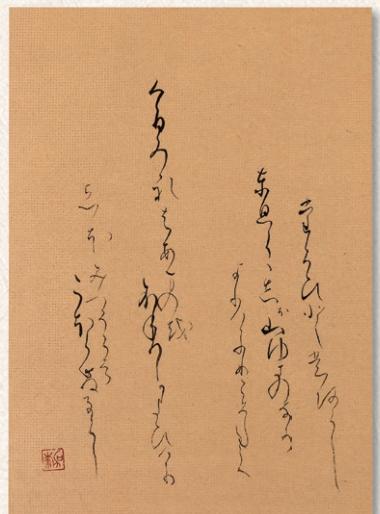
14 「蠟梅」 小川 博章（淑徳大学）



18 「巢守」 蒲池 真純 (NHK学園高等学校)



17 「荒津寛子詩」 柿木原 紫鈴 (元相模女子大学)



16 「重之集」 押野 加奈 (東京学芸大学附属国際中等教育学校)



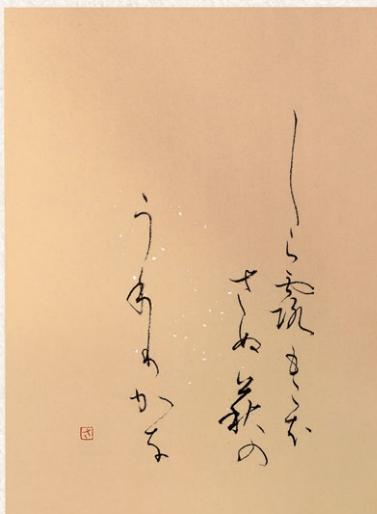
21 「月の友」 神戸 雅史 (千葉日本大学第一中学・高等学校)



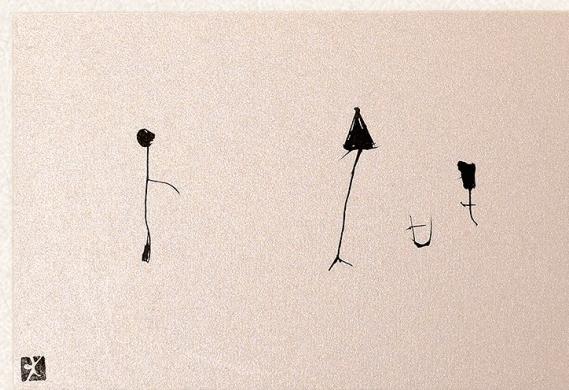
20 「致思」 川原 名見 (東京学芸大学大学院)



19 「逢福」 亀田 有鵬 (実践女子大学)



23 「芭蕉の句」 久保 彩織 (横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校)

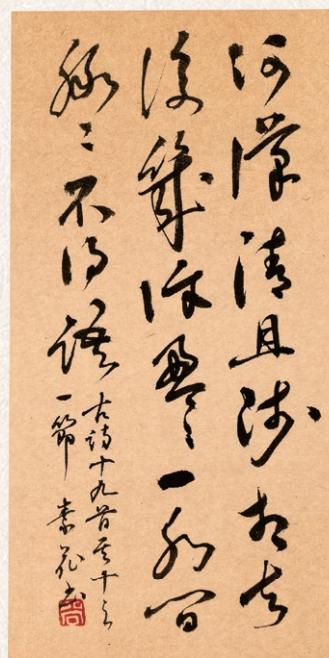


22 「知人」 草津 祐介 (東京学芸大学)

24 「み薦刈る」久保田 紫苑（岩手大学）



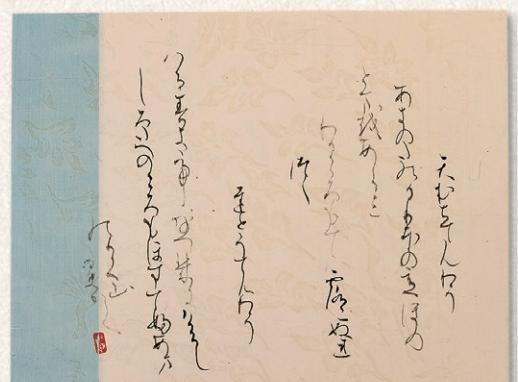
25 「文選古詩十九首より」久保田 素花（東京大学教育学部附属中等教育学校）



27 「鳥獲之力」毛塚 涼斗（東京学芸大学教職大学院）



26 「あきのたの他一首」熊坂 尚史（巢鴨中・高等学校）



29 「古今和歌集より」小磯 明照（東京学芸大学教職大学院）



28 「彭寿」見城 正訓（静岡大学）





32 「沈魚出聽」 権田 瞬一（大東文化大学）



31 「愚直」 小林 比出代（信州大学）



30 「沈元璣書齋快事」 小西 斗虹（香川大学）



33 「俊頼の歌」 斎木 華溪（茨城大学）



35 「神線作品 (臨 甲骨文)」 神野 大光（元熊本大学）



34 「磨而不磷」 城間 圭太（東京学芸大学）



信州手鑑「みすゞかる」坤

【外題】横田 閑雲（全国大学書道学会会長）



【内題】永由 徳夫（全国大学書道学会理事長）



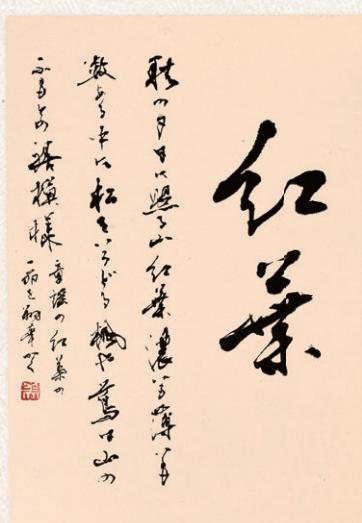
36 「至誠」 杉崎 光波（元 静岡大学）



37
— 趁無窮 — 杉山 勇人 (鎌倉女子大学短期大学部)



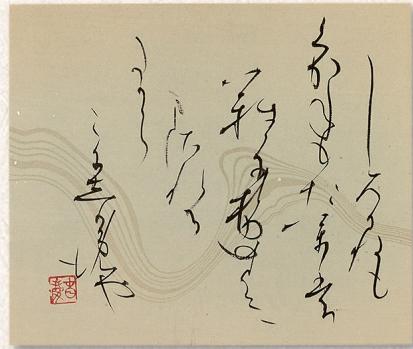
38 「紅葉」芹澤 翔華（千葉大学教育学部附属小学校）



秋の日は山の紅葉濃い等
最も木の紅葉が最も
秋の山の紅葉



40 「一壺天」 田中 秀征（徳島県立城東高等学校）



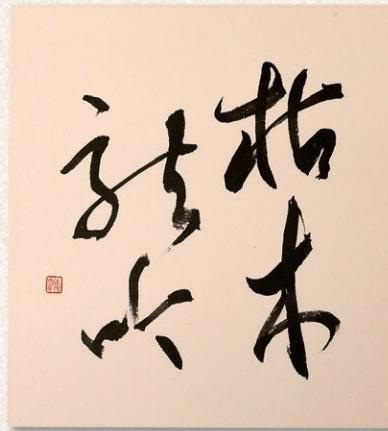
39 「短歌一首」 染谷 春慶（書文化研究会）



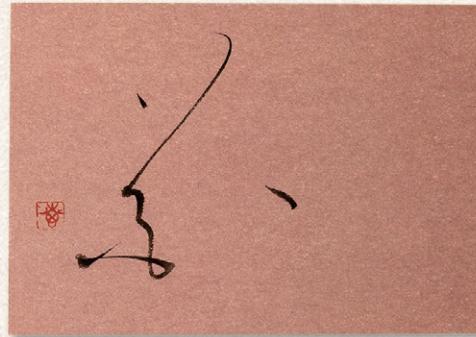
42 「商鼎秦瓦」 角田 勝久（新潟大学）



41 「龍飛」 張 莉（天森）（大阪教育大学）



44 「枯木龍吟」 徳泉 さち（日本大学）



43 「花」 津村 紫幸（都留文科大学）



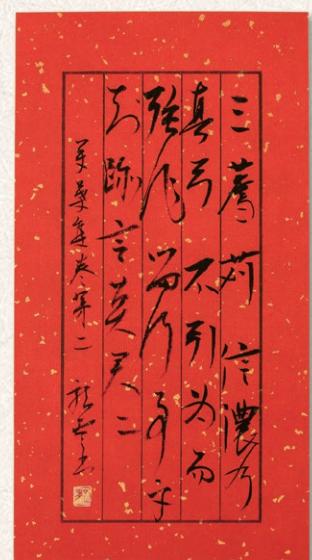
46 「颶」 中根 海童（岐阜女子大学）



45 「いつかきっと」 豊口 和士（文教大学）



48 「慮」 野中 吟雪（元新潟大学）



47 「三薦荔」 永由 徳夫（群馬大学）



50 「古城」 早川 桂央（相模女子大学）



49 「陸」 服部 一啓（福岡教育大学）



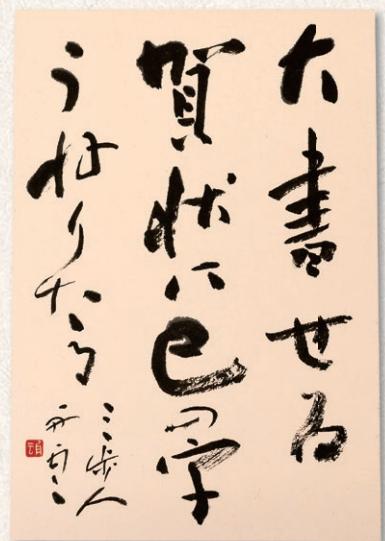
52 「鳳」 平倉 和則（東京女子大学）



51 「虹」 橋口 竹城（千葉大学）



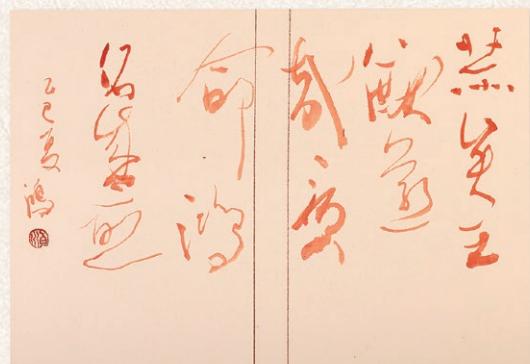
54 「流」 本田 容子（鎌倉女子大学）



53 「巳年賀状（自作句）」 廣瀬 舟雲（武蔵野大学）



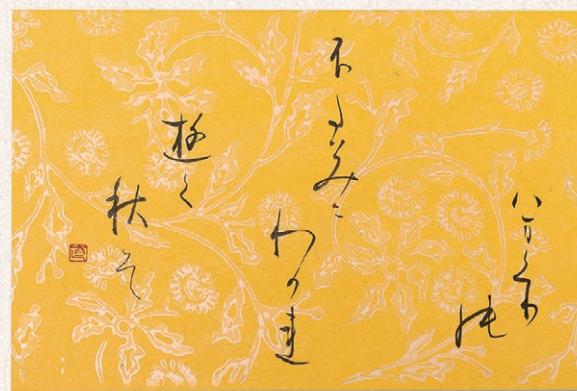
56 「虚室絶塵想」 松尾 碩甫（二松学舎大学）



55 「孔子廟堂碑文」 松尾 鴻（専修大学）



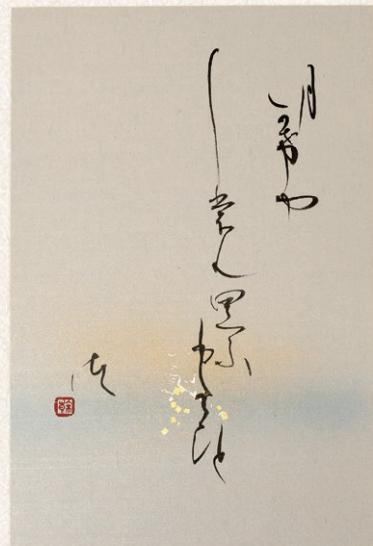
58 「觀菊」 松本 貴子（お茶の水女子大学）



57 「松尾芭蕉の句」 松原 直也（東京学芸大学附属高等学校）



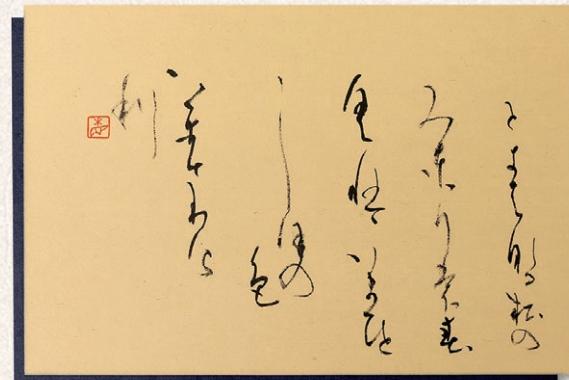
60 「鰯雲」 三浦 希韶（九州女子大学）



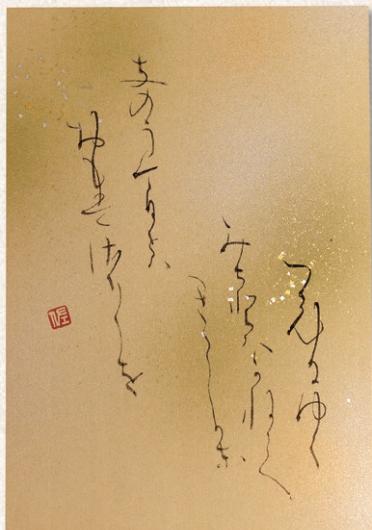
59 「松尾芭蕉の句」 真弓 幹子（香蘭女学校）



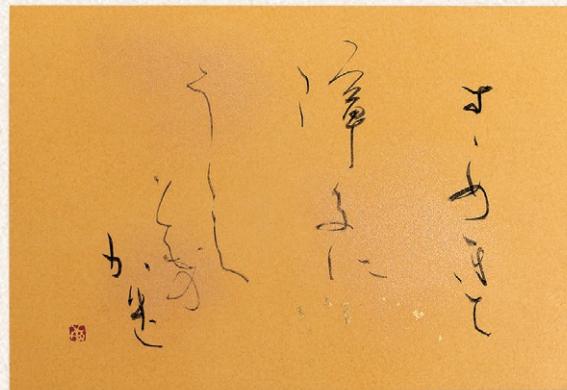
62 「誠」 森 哲之（広島文教大学）



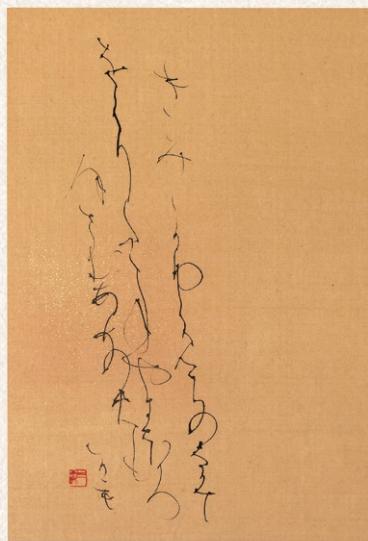
61 「いのちながし」 三井 相穹（陽山美術館）



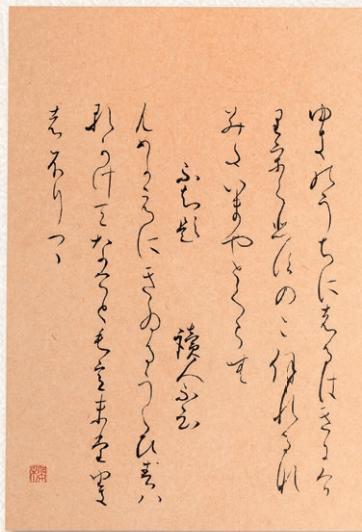
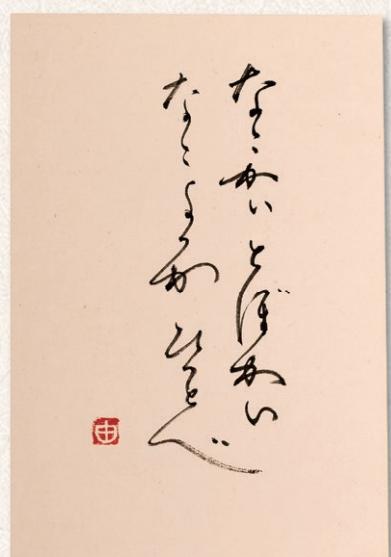
64 「つひにゆく」 柳田さやか (島根大学)



63 「花の影」 八巻 敏幸 (大阪樟蔭女子大学)



67 「天の火」 湯川三壽 (NHK学園)

66 「臨元永本古今集」
山本桜子 (群馬大学教職大学院)65 「なこかいとぼかい」
山下由季 (日本大学文理学部)68 「百臻至寶」
横田閔雲 (元跡見学園女子大学)

坤【跋】小林比出代 (開催校代表)



会員書作展 会場風景



信州大学創立70周年・旧制松本高等学校100周年記念事業 (2019年度事業紹介)



「淺岡先生頌徳碑」

杉浦重剛 撰 比田井鴻 書 〈大正 10 年建立〉



事業名「比田井天来揮毫『淺岡先生頌徳碑』の採拓」における
拓本の法帖制作 (2021 年度実施)

信州大学知の森基金 2025年度「学生社会活動支援事業」



「正木先生碑銘」

市村瓊次郎 撰 田代其次 書 〈昭和 12 年建立〉



事業名「田代秋鶴揮毫『正木先生碑銘』拓本の
法帖制作プロジェクト」

二〇一五年度 全国大学書道学会会員・準会員一覧

※ 氏名を五十音順に配列し、居住地の都道府県名・所属を記しました。所属について、変更の申し出がないものについては昨年度の一覧に掲載したものをそのまま掲載しています。

※ 氏名・都道府県・所属に変更あるいは誤りがある場合、記載漏れがある場合は、事務局まで文書・メールにてお知らせください。

現在、会案内・学会誌・会報等はメール便で送付しています。住所変更・転居の場合は新住所・転居先を速やかに事務局宛に文書でお知らせください。正確・迅速な発送を期すために皆様のご協力をお願いいたします。

年会費納入のお願い

本年度年会費が未納の方は、2月末日までに納入くださるよう、お願ひいたします。

〈昨年度まで完納されている会員〉

*年会費は、会員6,000円、準会員(大学院生)5,000円です。準会員は、大学院修了後、会員資格として取り扱います。

〈昨年度までに未納分がある会員〉

*未納分のある場合は、その旨を「払込取扱票」に記載しておりますので、本年度分と併せて納入ください。

■口座番号 00110-9-613810 ■加入者名 全国大学書道学会

〈全国大学書道学会 会計局〉 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学芸術系尾川研究室内

筑波大学芸術系 尾川研究室
TEL/FAX 029-853-2717 E-

TEL/FAX 029-833-2717 E-mail ogawa@geijutsu.tsukuba.ac.jp

『大学書道研究』のデジタル公開について

この度、大学書道学会では、本学会規約にも記載されている書道の研究の発展と教育への貢献を進め、近年の社会的要請に応え、さらには学会誌『大学書道研究』のさらなる利用促進を図るために、『大学書道研究』収録の研究論文、研究ノート等のインターネット上での無償公開を進めております。『大学書道研究』の電子無償公開が進むことにより、『大学書道研究』掲載論文が広く参照され、本学会誌の学術的価値の向上、更には斯界が発展する一助にもなればと思っております。

つきましては、『大学書道研究』第17号以前に掲載されました論文等の著者または著作権継承者の皆様に、本学会への著作権（この公告では複製権・公衆送信権を指します）の譲渡をお認めいただきたい旨記しました書類をすでに送付いたしております。

すでに、公開を希望されない等のご連絡を受付する期限を過ぎておりますが、何か掲載についてのご希望、不明点がございましたら、編集局・草津までお知らせください。お申し出がない場合は、本学会への著作権譲渡をお許しいただけたものとし、公開させていただきます。ただし、公開の作業中や実施後にお申し出がありました場合も、早急に公開停止の措置を講じてまいります。また、公開を希望されない場合も、書誌情報等は公開させていただきます。

なお、移譲いただきました場合でも、著者における著作者人格権やプライバシー、その他一切の権利を侵害することはありません。また、著者が独自に当該論文等を複製・公開することを妨げることはありません。

本学会では、電子無償公開により皆様の論文が広く参照され、『大学書道研究』の学術的価値の向上、さらには、書道の研究が発展することを願っております。著者の皆様におかれましては、何卒ご理解、ご同意いただければ幸甚です。

全国大学書道学会 編集局 草津祐介

メール：ykusatsu@u-gakugei.ac.jp

住 所：〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系

※ご連絡はメールまたは郵送にてお願いします。